

まえがき

我々の住む太陽系惑星第三番目の地球は、宇宙に幾多ある惑星の中でも、まれに見る美しい星であると言われている。そのように自然が美しく、豊富であればあるほど、その地に生まれる神話もまた、豊かになるのは当然のことであろう。

確かにこの地球世界には、各国各民族ごとに、それぞれ特有のすばらしい神話伝説がある。主なものとしてあげてみれば、ギリシャ・ローマ神話、エジプト神話、インド神話、中国神話、北欧神話などなど。その他南北アメリカにはそれぞれ独自の神話、アメリカインディアンの神話や、マヤ、アステカの神話などがあり、アフリカにはエジプト神話とは違う、各部族の神話がある。ヨーロッパやアジアの各地方にもそれぞれ独自の神話が語り継がれ、南洋の小さな島々にも独立した神話が伝えられてきている。そしてもちろんこの日本にも、主として古事記と日本書紀にまとめられた神話が存在していることは、今さら言うまでもないことである。

それら世界中にある神話は、民族風土特有の表現形式で語られているために、それぞれ独立した別物であるように見えるけれども、比較神話学の立場から見ると、それらが共通の要素を備えていることが、様々な点で指摘されている。この

事実は、いったい何を意味しているのであろうか？ 神話の類型は、一般には民族の移動とか、伝播の問題として考えられている。しかし、はたしてそれですべての説明がつくのであろうか？

とかく神話学者は、神話を實在の神々の動向を伝えるものとするよりは、人間が宗教的に、空想的に考えて作り出したもの、と考えたがる傾向がある。特に現代の物質科学万能の時代では、神と人間の距離があまりにも大きくて、神々というものが今も存在し、現実到我々の周辺で活動しているとは考えられなくなってしまうている。それが、神話が本来の意味での神話として受け入れられない、原因の一つであろうと思われる。それともう一つ、より本質的な責任は、唯一神を語りだしたユダヤ民族、あるいはキリスト教、そしてイスラム教、さらには唯一神を無とか空で表現して、それをめざすことで神々を拒絶した仏教にあると思われる。現代人に広く受け入れられている、そうした宗教と呼ばれる教えが、太古から伝えられてきた神々の世界を、人類から追いついてしまったことは、まぎれもない事実である。

本書では、神話とはいったい何なのか、そして神話と宗教の違いとはどういうところにあるのか、といったことを中心にしながら、太古から現代に至るまでの神々の動向を、さぐり出す試みが成されていくことになる。

本書は、「根元への道」シリーズの本編「日本の神々」にそえられた、解説書という立て前で書かれたものである。しかし本書は、神話をも含めた広い意味での宗教概論と言っていい内容の著書であって、必ずしも「日本の神々」の付属品ではない。もちろん両書を読みくらべるとき、その両方がお互いを照らし合って、より深い理解が得られる仕組にはなっている。しかしだからと言って、それぞれが独立して読めない書物というわけではない。

感覚的に物事をとらえるタイプの人にとっては、ドラマ化された「日本の神々」を読むだけで十分理解できてしまつて、理屈をこねまわす小難しい知識など、わずらわしいだけかもしれない。しかし現代人のように、論理力とか推理力の発達した人間にとつては、物事をただ漠然と感覚的にとらえるだけでは、なにかたよりになくて納得できない思いが残つてしまふ。そういう人たちにとつては、実話を見聞きするよりも、理論書とか解説を読んだり聞いたりするほうが理解しやすい面がある。そのため現代人向けには、本編のドラマと、それに対しての解説書がどうしても必要になつてくるのである。

最近、「知的所有権」ということがうるさく言われるようになってきて、本書を書き進めるうえで、そのことが常に頭から離れなかつた。本書のような各宗教や予言書、あるいはそうした領域の各説を紹介しながら解説していく研究論文の場

合、資料文献の引用や転載ということは、避けて通れない前提条件のようなものである。著作権ということではこれを封じられた場合、いい研究成果は期待できないし、読者にとっては理解しにくい不親切な解説書ということにならざるをえない。著作権という問題が、現在どういう規定で処理されているか、不案内なまま書き進めてしまった本書では、その許容範囲を逸脱している例もあるかもしれない。とすればそれなりの御叱責も、覚悟しておかなくてはならないと思う。だが引用文は、読者により正確な情報を伝えたかったから、という以上の他意はない。信じがたい神々のドラマを、文献資料からとらえ直してみようとすれば、そうする以外に方法がないからである。

ただ筆者に不満が残るとすれば、資料を十分調べきれなかった点にある。文献資料の比較考証が中心の学者と違って、筆者はあくまでも実体験を重視する修行人である。体験的な裏打ちのない、無味乾燥な資料をじっくり読み続けるだけの忍耐力が、次第になくなってきてもいて、最小限の資料でまかなってしまわざるをえなかった。そのために解説書として、十分に説明しきれない部分もあるのではないかと恐れている。その点を読者の方々にお詫びしなくてはならないし、誤りがあれば御教示願って、今後より完全なものに仕上げたいければと、考えているところである。

まえがき

平成元年九月二十日
台風一過快晴の日